

文語の可能動詞

高田 友

「ラ抜き言葉」なるものあり。上下一段活用及び力行變格活用の動詞に可能の助動詞「られる」の付きたる「見られる」「食べられる」を「見れる」「食べれる」と縮約する類なり。四段活用の動詞には「られる」ならで「れる」の付きて、「食はれる」「書かれる」杯なびと言ふによりて（さは誤用にあらず）、それが類推にて、「ら」は不要なりと誤解せられてかかる語形の現れたらんや。言語の頽廢の顯著なる一例にして、蔓延せぬ先に撲滅するに如くなしといへども、もはや羽翼なりて如何ともし難きの觀なきにしもあらず。

今一つ、「食はれる」「書かれる」には、「食へる」「書ける」なる異形ありて、これを「可能動詞」といふ。「見れる」「食べれる」は、この類推によりて生じたりとの説もあり。可能動詞の心算なれば、「食べれる」は「食はれる」の模倣と言はんよりは、寧ろ「食へる」に装へたりけんといふにいづれぞや。すなはち、一段活用の動詞には可能動詞の存在せざるに、無理あなからに可能動詞を作らんとて、「ら」を削りたるならん。

さて、さる醫師より、『喫煙は些かも害なし』と言へむとぞ聞きたる。この「と言へむ」なる語法、「と言へるであらう」と言ひて大過なしの意なるの段疑ふべくもあらず。可能動詞未然形「言へ」に意志推量の助動詞「む」の接続したるに相違なからん。現代文語文に屢しばしば見る形なり。あるいは江戸文學にも其の例ありと聞けど、つねづね「なんかへんだ」と思はずんばあらざりき。

なにゆゑに「なんかへんだ」と我が思ひけると自問自答すれども謎は解けず。沈思黙考して至りたる結論は、「文語文法には可能動詞の存せざるにあらずや」と是なり。

文法書を繙ひもとくに、「文語に可能動詞なし」との記述なし。「南京大虐殺ありき」との儀は、誠にその實態あらましかば證明は容易ならまし。未だに證明せられざるがゆゑに「幻の南京大虐殺」とは申すめり。「然れども、「南京大虐殺なかりき」との證明は所謂「悪魔の證明」にて、ただ一例を探し出せば、構築せる論理は悉く覆滅せらる。

すなはち「文語に可能動詞なし」とは、如何に古典を閲げんして可能動詞を見出さずと言ふとも、餘人平安の物語の片隅に一例ありと證言すれば、立刻たちまちに此の命題は虛妄と化するのみ。加之しかのみならず、誰か能く古典を悉く検索せん。未知の資料發掘せられて、可能動詞の一例出現するの可能性絶無といふを得ざれば、この命題を檢證によりて證明するは不可能なるべし。

かくなる上は、數學的論理によりて、「文語に可能動詞の存せんとは理に合かなはず」と證明するの外なし。南京大虐殺にたとふれば、「皇軍は現御神あまの御みかみに仕ふる神兵なれば、そもそも殘虐行為を享樂せんとの劣情あるなし」との前提にて、天孫降臨の歴史的事實なりしを證明するの要あり。

さて、「文語に可能動詞なし」を天孫降臨の論理に循ひて證明せんとして、爰許こゝ煩冤わんえん久しきに亙りたるが、一日ハツと閃きたり。

文語に口語の「書ける」に該あたる可能動詞ありとせば、未然形、連用形は「書けズ」「書けタリ」となるは必定。然しかるやう、則すなはち、終止形は如何ならん。下二段活用たらんには、「書く」となるらめど、「書く」に write と can write の雙方の意を覓もとむるは、かの御曹司たる政治家何某なにがしにイケメンなれば人柄爽やかなるに相違なし。何條なだやう私心あるべきと崇め奉るの愚を犯すに似たり。剩あまつへ、終止形「書く」なれば、すなはち連體形・已然形は「書く」「書くれ」。かかる活用形を想定するは荒唐無稽の仕儀なるべし。

されば、終止形は「書く」にあらず「書ける」なるべしや。否々、今日明日に三千世界の崩壞するあらん

とも、終止形「書ける」は存在するを得ず。なんとすれば、「書けズ」「書けタリ」「書ける」と活用するは下一段活用なり。文語には「蹴る」を唯一の例外として、下一段活用は存在せず。かくて、我が夢想の産物たる文語の可能動詞「書ける」は終止形存在するを得ざるを以て、單語自體、存立の基盤を失ふに到れり。

すなはち、「〜と言へむ」は正統文法を逸脱してあり。「〜と言ふを得む」「〜と言ふべしや」なを杯と言ひ替ふるの要あり。

さて、「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と言へり」とは福澤諭吉の言なり。眞は、米國トーマス・ジェファースンの言へるを翻案したるに過ぎず。さればこそ、「言へり」の一句を加へたれ。

この「言へり」「言へる」を吟味せん。いづれもいづれも可能動詞にはあらず。「言ふ」の命令形（已然形に非ず）「言へ」に完了助動詞「り」の接続したるなり。

また、「汝を愚なりといふにあらず。怠惰なりと言へるのみ」の「言へる」は如何。これまた、完了の「り」なれば、可能動詞の存するにはあらず。

因みに、完了助動詞「り」の下二段活用動詞に接続したらんには、如何なる形を取ると思召すや。「据う」に接続するや、「据ゑり」となるらんと推測せらるるか。然らず。「り」は四段活用動詞の外はサ變「す」に接続して「せり」を作るのみ。二段活用動詞には接続する能はざれば、「据う」の完了形を作らんには、「据ゑつ」「据ゑぬ」「据ゑたり」なを杯、他の助動詞を用ゐるの外なし。

文語文を書かんと欲すれば、まづ、「なんかへんだ」の意識を持たれよかし。自ら推敲して、「なんかへんだ」と思ひたる時は、大方は口語表現に流れてあり。「叱る」は口語表現なれば、「叱責す」「責む」「たしなむ」等、なを盃ぞ餘の申し状を探さざる。「他」を避けて「餘」を撰びたり)

「世界一の美女」と言はんときは、「世に類なき佳人」とするの便法あり。「美しき文を書く」とは、言ひ替への技倆（技量にあらず）を磨くの外ならず。

（平成三十一年二月二十日受附）